

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370053

研究課題名(和文) ヴェーダ文献の儀礼解釈学に表れる死生観の研究

研究課題名(英文) A Study on the View of Death and Life Manifested in the construal of Vedic Rituals

研究代表者

大島 智靖(Oshima, Chisei)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・研究員

研究者番号：60626878

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：ソーマ祭におけるディークシャー(潔斎)の諸儀礼解釈を文献学的に研究し、そこに表れる象徴的な死と再生について、その概念の一端を明らかにした。また、現代インド都市部の婆羅門に関する現地調査をブナーにて実施し、現代に生きる婆羅門の伝統性すなわちヴェーダ祭式の実施状況や家系等取材した。この調査をもとに、古代文献を通して知る婆羅門のヴェーダ文化と現代都市部のそれとの間に見出される継続と変容を考察した。

研究成果の概要(英文)：Investigating Vedic texts on the interpretation of the consecration in the Soma sacrifice, a portion of the concept of the symbolic death and life manifested there has been elucidated. Furthermore, I surveyed the modern Vedic priest family having a traditional life in the urban area, Pune. I obtained an interview with the householder and his sons and heard about their circumstances like an operational situation of Vedic rituals, family tree, and so on. Through this survey, the change and continuity found between Brahmanical culture seen in the ancient texts and that of the modern present city were considered.

研究分野：インド学

キーワード：ヴェーダ 婆羅門 ヴェーダ祭式

1. 研究開始当初の背景

(1) 古代インドの祭式儀軌解釈を伝えるブラーフマナ文献の研究は、印欧語比較言語学分野での進展や新たな校訂テキストの公表もあり、文献解釈の深化と再検討が求められている。報告者はソーマ祭のディークシャー(本邦で謂う「精進潔斎」に類似)における儀礼の再構築及びその死生観、さらにヴェーダ学派間の思想発展史に従来取り組み、ディークシャーと密接な関係を持つ動物犠牲祭も含め、ソーマ祭の文脈の中で双方向から総合的に研究する必要があると考えてきた。

(2) 一方で報告者は2012年以来プネーのワルジェー地区に住む婆羅門クルカルニ師のもとを訪れ、学際都市として最前線にあるプネーにおいて生き続けるヴェーダの伝統について調査が必要であると考えた。南インドに残る伝統的婆羅門家系の村落形態とは異なる、新しいヴェーダの伝承である。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、古代インドのヴェーダ祭式文献に記されたソーマ祭祭主と、動物犠牲祭における動物の取り扱いに見る死生観を明らかにすることにある。

(2) 現代インド社会の婆羅門が都市部で行っているヴェーダ祭式の現地調査を行って、最前線におけるヴェーダの「継続と変容」を分析し、史的理解を目指す。この研究は従来報告者が取り組んでいる古代インドの中心的祭式であるソーマ祭の文献研究をさらに進展させ、従来のインド思想史の中に新たな資料と視点を提供しようとするものである。

3. 研究の方法

(1) ブラーフマナ文献におけるソーマ祭(基本形アグニシュトーマ)の記述部分を翻訳・研究する。ソーマ祭におけるディークシャーと動物犠牲祭の分析を中心にして、ヴェーダの死生観の生成発展を総括する。

(2) インド・マハラシュトラ州の都市プネーにおいて執行されているヴェーダ祭式の実態を調査する。婆羅門へのインタビューにより家系などの外的環境と祭式に対する意識という内面的環境を詳らかにする。現在行われている祭式の記録を行う。

4. 研究成果

(1) アグニシュトーマにおけるディークシャーと動物犠牲祭は、お互いが別個の複合儀礼でありながら概念上の関連が強く、犠牲獣はディークシャーを執行した祭主の身代わりとなる(詳細は引用文献①)。こういった概念にも支えられ、犠牲獣は人間と同等の倫理観をもって迎えらる。犠牲獣に対する倫理観は、ブラーフマナ文献の散文部分のみならず、殺害・解体時に唱えるマントラに反映されている。犠牲獣祭解明の第一歩として、複雑に絡み合った各学派のマントラを整理し、そのテキスト発展史を探った。従来、性

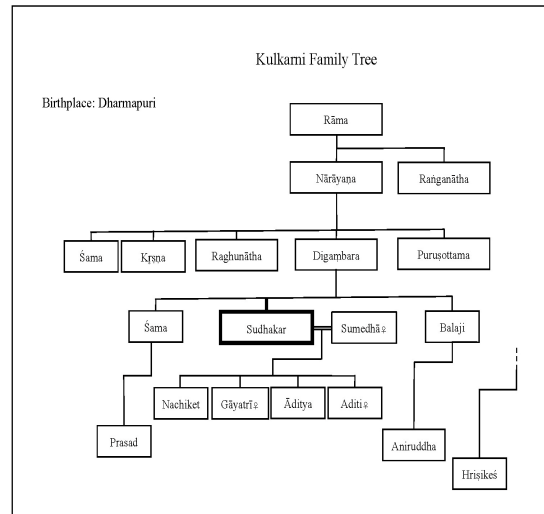
質上当然であるがブラーフマナ文献散文部分の記述に注目が偏っていた。しかしマントラの分析により、祭官学者たちの、より始原的な動物に対する死生観・倫理観の表明があることを示すことができた。

(2) プネーにおける婆羅門の調査

① 調査対象の婆羅門について

スダカル・クルカルニ師は妻スメーダと4人の子供たち及び4人の親族と共にプネーのワルジェー地区にある住宅街に住んでいる。賑やかなカルウェー大通りから少し入り組んだ路地を入った住宅街の一角に3階建ての四角いコンクリート・ハウスがある。家屋の向かいには祠と小さな広場があるが、屋上に本格的な祭場が設営されており、日常ヴェーダ儀礼はこの屋上で執行される。

師は1961年生まれでゴートラとしてはバーラドヴァージャを冠している。ヴェーダの学派としては白ヤジュルヴェーダ系統のマーディヤンディナ派に属している。生誕地はダルマプリ(タミルナドゥ州北部)であり、祖先も代々ダルマプリである。いま、クルカルニ家の家系を三代前まで示すならば以下のようなになる。



ヴェーダは伝統的に父から息子へと継承されるが、クルカルニ師の場合、父のディガンバラとは別の人物を師匠(guru)としてヴェーダを学んでいる。師匠はランガナータ・セルクル師といい、プネーから東へ380kmほどのガンガケドゥ(マハラシュトラ州)にある「マハルシ・ヤージュニャヴァルキヤ・サンスクリット・ヴィディヤー・プラティシュターナ」というヴェーダ学校を営んでいる。クルカルニ師は自身の病気や家庭の経済的・学問的な事情などを考慮してこの学校に通うことを決めたとする。その後プネーに移住し、さらにサンスクリットを学ぶ。現代の婆羅門には兼業する者も少なくないが、クルカルニ師は専業の婆羅門としてインド各地のヴェーダ祭式に招聘され、生計を営んでいる。古来祭火を設置した正統な婆羅門は「アーヒターグニ」と呼ばれ、伝統を守る責

重なる存在として、現代では特にその社会的評価は高いといえるが、クルカルニ師はアーヒタアグニとして今年でちょうど 20 年のキャリアを持っている(引用文献、p. 80)。すなわち、1日2回のアグニホートラ、月2回の新満月祭、年1回のチャートウルマースヤという定期的な日常ヴェーダ献供を継続しているということである。こういった家庭における定例献供の他に、会場を設けて執行する大規模祭式がある。クルカルニ師はソーマ祭あるいは願望的穀物祭を定期的に執行している。

ヴェーダ祭式の執行実績

以下はインタビューによりまとめた、師のヴェーダ祭式執行の経歴である。執行年、祭式名〔役〕 執行地名 で挙げている(MR=マハーラーシュトラ州)。

- 1998 アグニシュトーマ [祭主] <バルシー、MR>
- 2010 チャートウルマースヤ [祭主] <ガンガケドゥ、MR>
- 2012 サハスラ・ジヨーティシュトーマ [祭主] <アーメドナガル、MR>
- 2012 アテヤグニシュトーマ [祭主] <アーメドナガル、MR>
- 2013 ヴァイシュヴァーナラ・アティラートラ [祭主] <ムンバイ、MR>
- 2014 ショードシン [祭主] <アーメダバード、グジャラート州>
- 2014 ヴィシュヴァジット・アティラートラ [祭主] <アーメドナガル、MR>
- 2015~7 (毎年2月) ミトラヴィンダ・イシュティ [祭主] <ヴァラナシ、ウッタラプラデーシュ州>
- 2018 ジャナク・サブタラートラ [ソーマ・プラヴァーカ] <プシュカル、ラージャスターン州>

2010及び2015~7の祭式は穀物祭であるが、その他はソーマ祭のヴァリエーションである。ソーマ祭は5日以上日程で開催される大規模な祭式であり、一度でも祭主として執行すれば、その者は「ソーマヤージン」の称号を得る。クルカルニ師は「ソーマヤージン」の中でも精力的にソーマ祭を執行しつづけている人物であり、その社会的信頼は厚い。2018は師匠の学校を会場として11日間に渡って開催されたソーマ祭だが、クルカルニ師は「ソーマプラヴァーカ」という祭式冒頭の宣誓者の役を任されている。古層のヴェーダ文献からはその実体が見えにくい存在であるが、現代においても生き続けていることが判明した。

また師は2016年に「ヴァーージャペーヤ」というさらに大がかりな祭式(王権儀礼的要素を持ったソーマ祭のヴァリエーション)を執行する予定を立てていたが、主に経済的な理由で延期を重ね、2018年以降に持ち越され

た。報告者の研究期間に開催されることを期待して貴重な映像記録の準備をしていたが、残念ながら実現しなかった。

- また、師の所有するヴェーダ・テキストを以下に列挙する。16~26年前のものである。
- 「ダルシャプールナマース・イシュティ」(本人によるハンドブック)
 - 「サンスカーラ・プラヨーガ」(本人によるハンドブック)
 - 「カーティヤヤナ・シュラウタ・スートラ」(普及版)
 - 「チャートウルマースヤ・プラヨーガ」(パドマナーバ仙)
 - 「アグニシュトーマ・パッドァティ」(バラバドラ)
 - 「カルマカーンダ・プラディーパ」(アナ・シャーストリ・ヴァレー)

このように、世襲という伝統的継承ではなく、学校という現代的な手法でヴェーダを学びながらも、古代テキストに忠実なヴェーダ祭式を執行しているクルカルニ師の生活形態が明らかになった。

現代婆羅門の死生観

神話世界、またはマントラの持つ霊力といったヴェーダ文献にあらわれる諸概念は、他民族の他宗教と同様に、現代社会の人々にとって伝統宗教の内に収められ、展示物のように見なされているように思われる。しかしブネーといういわばエンジニアリングの最先端都市において、クルカルニ師とその家族たちは、梵や輪廻といったヒンドウイズム全体を貫く概念への信仰はもちろんだが、ヴェーダ文化の遺産に対して極めて強い信頼を寄せている。息子たちの中には大学で工学を学びエンジニアになった者もいるが、婆羅門としての生活は棄てておらず、祭式の際は祭官として父を補助している。マハーラーシュトラ州にはこのような婆羅門ファミリーがいくらか現存しているが、交流も決して少なくないという。祭式の儀軌・手順は古来学派によって異なり、その批判や整合性についての議論も為されてきたことはヴェーダ文献から判るが、クルカルニ師も国内を飛び回り議論を重ねた経験があるという。また、ウパニシャッド的哲学議論もときに為されたようである。

現代インドにおいては、いわゆるスピリチュアル的なパフォーマンスを喧伝する婆羅門が多い。これらと比較するとクルカルニ師は本格的なアーヒタアグニであり、より伝統的である。しかしケーララ州で見られるような国内最古の伝統を残す村落の婆羅門よりは現代的な要素が多い。例えば、ヴェーダは本来一般庶民への「布教」的な要素を持たないが、クルカルニ師たちは人々にヴェーダ文化の意義を説く機会を持つことがあるという。仏教やジャイナ教、あるいはイスラームといった姉妹宗教や他宗教との宗教的議論

もあるが、そこでイニシアティブをとるような方向へは行かず、それなりの配慮を欠かさない。この背景にはインドの政治状況すなわちテロや紛争がある。

こういった宗教的配慮が為された彼らの活動は、伝統の中にありながらも都市部生活者として異なった宗教的背景をもつ他者との接触・宥和を促進しようとする、いかにも現代的な態度であり、古代インド・ヴェーダ文化の継続と変容を示す一例として捉えられる現象である。

<引用文献>

① ōshima Chisei, " *nis-kray'*: On the Concept of Buying-off of the Self in Vedic Rituals" *Journal of Indian and Buddhist Studies* Vol. 60, No. 3, 2012, 1125-1131

Nanaji Kale, *The Rare Human Species: Ahitagnis in India* 2004, Yogiraj Ved Vidnyan Ashram, 2005.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

① 大島 智靖、ヴェーダの「香」、待兼山論叢 哲学篇、査読有、第51号、2017、19-34

大島 智靖、王権即位式と婆羅門 - 王族祭主とソーマ祭 -、*印度学仏教学研究*、査読有、第64巻、第1号、2015、267-272

大島 智靖、Dikṣā と Avantaradikṣā - ソーマ祭祭主の超人性とその論理 -、*印度学仏教学研究*、査読有、第63巻、第1号、2014、286-291

[学会発表](計3件)

① 大島 智靖、ヴェーダ祭式における犠牲獣の殺害行為と祭式学的展開 pasūpakarana とそのマントラ構成、日本印度学仏教学会第68回学術大会、2017

大島 智靖、ヴェーダ研究とウパニシャッドの“伝統的”解釈、パネル発表 C「「越境」するヴェーダ研究 ヴェーダ文献研究の方法と広がり」、日本印度学仏教学会第68回学術大会パネル発表、2017

Ōshima Chisei, On the Role of Brahmana and Rajanya in Kingship Rituals, The 16th World Sanskrit Conference(Bangkok, Thailand), 2015

[その他]

事典項目

① 大島 智靖、ヴェーダ祭式の供物、丸善出版、*インド文化事典*(*インド文化事典編集委員会編*) 2018、362-363

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大島 智靖 (Oshima, Chisei)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・研究員

研究者番号: 60626878